
† マンハッタンの奇跡 †

Y a y o i K a z u h a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

十マンハッタンの奇跡十

【Nコード】

N7159D

【作者名】

Y a y o i K a z u h a

【あらすじ】

両親からの招待で、パーティーの為にアメリカに向かったコナン達。其の裏では、優作の依頼主が、とんでもない事件に巻き込まれていた！依頼主の影に交差する例の組織が存在をチラつかせる。やがて、怪盗キッド・FBIまで登場し、事件は意外な展開を迎える。果たして、真犯人は一体誰なのか！？そして、最後に起こる奇跡とは、一体！？『小さくなくても頭脳は同じ』 迷宮無しの名探偵！！『真実は何時も一つ！！！！』*****前の『不死鳥の宝玉』は、諸事情により消去致しました。此方は、以前から書いて

†マンハッタンの奇跡†

いたものです。
気軽に読んで頂けると光栄です

依頼編 File・1

話は、とある電話から始まった

阿笠邸。

コナンは何時もの様にパソコンで黒の組織の情報を探っていた。すると　プルルルルル…と、電話が鳴った。ガチャ…

阿笠博士が受話器を取った。

「はい、阿笠です…」

「あら、阿笠博士？私、有希子よ」

声の主は、コナンの実の母親の工藤有希子だった。

「おお…有希子君か…！久しぶりだのう…」

「お久しぶり。新一、今居るかしら？」

「新一君か？新一君なら、今居るぞ？」

「じゃあ、代わってくれるかしら？」

「おーい、新一。有希子君からじゃぞ？」

博士は受話器を押さえながら、コナンを呼んだ。

「母さんから？」

コナンはそう言って、電話に出た。

「代わったよ…母さん…」

「はーい。新ちゃん。元気にしてたあ？」

やけにハイテンションの有希子に対し、コナンは何故か迷惑そうな表情をしていた。

「で、何の用だよ…？母さん…」

「実はね…優作の『闇の男爵』ナイト・バロンシリーズの最新作がまたまた大ヒットして、記念のパーティーがマンハッタンのある会場で開かれる事になったのよ！」

有希子は、嬉しそうに受話器越しに言う。

「で、何？」

未だに状況が飲み込めないのか、コナンは更に迷惑そうに聞いた。

「何って…新ちゃんを招待しようかな？あって思って電話したのよ」

「でも、俺…此方が」

「勿論、小五郎君の所にも電話しといたから」

（な！？）

「あと、大阪に居る平次君の方には、数日前に手紙を送つといたから、多分そろそろ其方の方に来ると思うから。其れじゃあ、またね。新ちゃん」

ガチャ！

有希子はそう言って、一方的に電話を切った。

プープープ…

（おいおい…良いのかよ…！？此れで…）

コナンはそう思いながら、受話器を元の位置に戻すと、再びパソ

†マンハッタンの奇跡†

コンに向かい、また調べ事を始めた。

依頼編 File 2

数分後。

有希子の言う通り、平次と和葉が博士の家にやって来た。

「よう！ボウズー!!」

「こんにちはあ、コナン君」

「こんにちは」

コナンは、笑顔で答えた。

しかし、其の笑顔は少し引きつっていた。

「おお…良く来たのう。まあ…ゆっくりして行ってくれ」

『おおきに』

博士はそう言って、平次と和葉を中へ招き入れた。

「おい…博士…」

コナンは、珈琲を入れようとしている博士を呼び止めた。

「何じゃ？ 新一」

「まさか…また母さん達と…」

「ス、スマンのう…有希子君には、『黙っといってくれ』と云われとつたんじゃ…」

ハア…

「道理で、可笑しいと思ったんだ…何せ、前にもあったからなあ…」

コナンは、溜息をつきながら、パソコンのキーボードを打つのを止める。

勿論、作業を途中止めた理由は…

「はい、どうぞ…」

灰原はそう言って、珈琲を二人に出した。

「おおきに。頂きまーす」

和葉はそう言って、珈琲を一口口にした。

「おい…工藤。ホンマに俺等も行つてええんか？其のパーティーに」

平次は、不安そうにコナンに聞いた。勿論小声で…

流石に、和葉の前では、堂々と話が出来ないのだ。新一として
そう…此れが作業を止める理由である。

「さあな…母さんが云つてたから、良いんじゃないのか…？」

コナンはそう言って、珈琲をカップに注ぐ。

ブルルルル…

すると、電話のベルが再び鳴った。

ガチャ…

博士は急いで取った。

「はい…阿笠です…」

「もしもし？阿笠博士？蘭です」

今度の声の主は、蘭だった。

「おお…蘭君か…何か用かのう？」

「其方に、今…新一居ますか？」

「ああ…今は」

チラッ…

博士はそう言って、コナンに目を向けた。

すると、コナンは口到人差し指を当てて合図した。

「今回は、先にあっちに行っとるらしいから、今は居らんのう…」

「そうですか…じゃあ、明日空港で…」

蘭はそう言って、電話を切った。

ガチャ…

ハア…

博士は、溜息をつきながら、椅子に座った。

依頼編 File・2 (後書き)

続けて更新。

前から書いていたものでね

確か71のところで行き詰まって途中止めになったのかな？

1・5話の感じで、只今書き直し中。

多分、47話から書き下ろしの形になります。

『tMaster of Secret』と同時進行という形になります。精一杯頑張っていきたいと思えます！！

4月末よりコナンの誕生日に向けて、BD小説企画始動しますよ！！

コナンの誕生日5月4日までに、BD小説を4作UPしますので、

お楽しみに！！！！

依頼編 File 3

「コナン君、蘭ちゃんも行くの？」

「うん。小五郎のおじさんも一緒だよ」

コナンは、和葉の質問に無邪気に答えた。だが心の中では

(蘭の事だからな…まさかな…)

と、嫌な予感を肌を感じ取っていた。

「ほな、アタシ、先に蘭ちゃんつちに行つとくわあ。平次の事、宜しく頼むね。コナン君」

「うん！」

「ご馳走様でしたあ」

和葉はそう言って、外に出て行った。

和葉の姿が見えなくなった後、平次が口を開いた。

「おい…工藤…」

「ん？」

コナンはパソコンのキーを叩くのを止め、平次の方に振り向いた。

(うつ…ノノこいつ…何で振り向く瞬間だけカワエエんや!?何かムカツクわあ…でも…やっぱ…今のは…カワエかったあ)

平次は心の中でそう思いながら、顔を赤めらせた。

「な、あに、赤くなってるんだよ…？服部」

「べ、別に…何でも無い…」

「貴方、さつき…工藤君の振り向く瞬間の顔を見て、『可愛い』ってときめいてたでしょ？」

灰原が横から平次に突っ込んだ。

「ほお…」

コナンはそう言って、平次を見た。

「な、何云うとんや！？お、俺はそうは思つたらんぞ！？」

平次は慌てて言った。

「凶星ね…明らかに…」

「ああ…凶星だな…」

コナンと灰原は、同時に頷いた。

其の日の夜。

皆が寝静まった夜中の零時を廻った頃。地下室にはまだ明かりが灯っていた。

カタカタカタカタ…

灰原は、まだパソコンのキーを叩いている…

(早くこの薬を工藤君に渡さなくちゃ…)

灰原はそう思いながら、解毒剤のデータを打っていた。

翌日。成田空港…

アメリカ・ワシントン空港行き十時十分発JAL749便。それが、コナン達が乗る特別便である。

この先で何があるのかは、今のコナン達は知るよしもなかった…

「遅いわね…園子…」

蘭は、時計を見ながら言った。

時計は其の時、九時三十分が過ぎようとしていた。

「あのう…蘭さん…僕達も良いんですか？パーティーに招待して貰っても…」

光彦は、怖ず怖ずしながら言った。

「そう云えば…」

「如何して、お前等まで…」

気が付けば、元太・光彦・歩美の少年探偵団まで此処に来ていた。

「良いのよ。私が招待したんだから」

声は後ろからだった。

「えっ？」

コナンは間の抜けた声をして、まさかと思い、後ろを振り向いた。其処には、コナンの実の母・有希子が立っていた。

「お久しぶり、蘭ちゃん」

有希子は笑顔で言った。

（か、母さん！？）

「新一のお母さん！？」

コナンと蘭は、同じ様な顔で驚いた。

「い、何時、此方に戻ってらしたんですか！？」

「昨日の昼かしら…：そうそう、博士の所に電話した後よ」

（どーりで微かにエンジン音が聞こえた訳か…）

コナンは有希子をジト目で見た。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7159d/>

＋マンハッタンの奇跡＋

2009年7月1日21時17分発行